



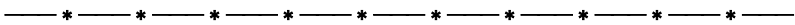
Data

監督：ギャレス・エドワーズ
 脚本：マックス・ボレンスタイン
 出演：アーロン・テイラー＝ジョンソン / 渡辺謙 / ブライアン・クラクストン / エリザベス・オルセン / ジュリエット・ビノシュ / デヴィッド・ストラザン / サリー・ホーキンス / カーソン・ボルド / ヴィクター・ラサク / リチャード・T・ジョーンズ / ジヤレッド・ケツ

👁️👁️ みどころ

2014年のハリウッド1番の話題作はコレ！東宝系のスクリーンの予告編では、一体何度ゴジラの咆哮(?)を聞いたことだろう。渡辺謙扮するイシロー・セリザワ博士の登場を考えると、日本版『ゴジラ』(54年)への愛着を込めたものだが、さて、その出来は？

ハワイの大津波、ラスベガスの街の大破壊、そしてサンフランシスコでの巨大生物ムートーとゴジラの大決戦へと、観客の目を引き付けていく展開は、さすがハリウッド版。さらに、余韻の残るラストも日本版そっくりだが、ゴジラ対モスラのテイストには、かなりの違和感も・・・。



■□■すごい前宣伝！すごい興行収入だが・・・■□■

私は今年5月19日に(日本語版)『ゴジラ』(1954年)を観たが、1954年に961万人を動員した『ゴジラ』のデジタルリマスター版が今年公開されたのは、5月16日に全米で公開されたハリウッド版『GODZILLA』(14年)の宣伝を兼ねたものだ。他方、最近オーエスの株主優待券を使って「西宮OSシネマズ」に行く回数が増えてきた私は今年、何度『GODZILLA』の予告編を見たことだろう。日本の公開では、週末3日間での興行収入が6.8億円に上ったうえ、全世界の興行収入は累計500億円のビッグヒットになっているらしい。

ハリウッド版『GODZILLA』は1998年にもローランド・エメリッヒ監督の手によって製作されているが、その評価はあまり高くないらしい。しかし、今回の『GODZILLA』は渡辺謙がイシロー・セリザワ博士役で登場しているうえ、「We call

him ゴジラ」という「決めゼリフ」がコマーシャルで大量に流されているから、「日本版ゴジラ」の要素が多分に盛り込まれているはずだ。しかし、少なくとも今年の大きな話題についていくためにも、本作は必見！そう思い、遅ればせながら映画館に行ったが、意外にも館内の入りは半分以下。アレレ、もうゴジラ人気は終わってしまったの・・・？

■研究機関モナーク/MONARCHとは？■

アメリカはオバマ大統領の「求心力」が弱まり、「世界の警察」としての役割も低下する一方だ。しかし、これだけはやっておかなければ仕方がない、とばかりに8月8日からはイラクへの一部空爆に踏み切った。ウクライナ情勢、イラン情勢、シリア情勢などどれを見てもアメリカは大変だから、そんな2014年の今、GODZILLA問題が発生すれば更に大変だが、本作導入部で描かれる研究機関「モナーク/MONARCH」とは？本作の主人公は1人に限定せず、数人に分担させているが、ストーリーを動的に追っていく若者はアロン・テイラー＝ジョンソン演ずるフォード・プロディ。彼は2014年の今、アメリカ海軍の大尉だが、15年前は？本作導入部の舞台は、1999年のフィリピン。そこには「モナーク/MONARCH」という研究機関があり、セリザワ博士たちはある研究に熱中していた。また、そこには放射性物質を含んだ化石のような巨大物体があったが、そこではさらに全く別の巨大生物の卵の殻のようなものが発見された。さてこれは一体何？

他方、本作導入部では、日本の沿岸部のジャンジラ市にあるという原子力発電所の研究所が描かれる。そこで働いているのがジョー・プロディ（ブライアン・克蘭ストン）とその妻のサンドラ・プロディ（ジュリエット・ビノシュ）たちだが、その原子力発電所を襲った大きな揺れで、原子炉が制御不能に陥ってしまったから大変。さらに、ジョーは核物質の拡散を防ぐため、自ら妻の退避路を封鎖せざるをえなかったから、そのショックは大きかった。

この導入部ですべてのテーマが明確に示されているわけだが、実は映画を観ている私たちがその「論点」を正確に理解するのは結構難しい。私が観に来たのは『ゴジラ』であって、『モスラ』ではないはずだが・・・。頭のどこかにそんな思いも・・・。

■あれから15年、父子の共闘はどこに向かって・・・？■

本作中盤のストーリーは、サンドラを失ったときはまだ子供だったフォードがアメリカ海軍大尉となり、今なお、なぜ原子力発電所が崩壊したのか？なぜ妻サンドラを失ったのか？について納得できないジョー博士とともに活動に乗り出す姿からスタートする。しかし、そもそも日本の沿岸部のジャンジラ市とは一体どこにあるの？それは東京の近くらしいが、放射能汚染のため、15年間も立入り禁止とされたままなどということが、この高度情報化社会の日本でありうるの？しかも、フォードとジョーが違法に立入り禁止区域に

侵入してみると、野良犬が歩き回っているうえ、ジョーが持つ計器には放射能の反応はゼロ。アレレ、これは一体・・・？

しかして、警備員たちに逮捕され巨大な施設内に連行された2人は、当然厳しく尋問されたが、その尋問者は一体誰？また、2人がそこで見た、謎の巨大な物体とは？ジョーはよほど不運な星の下に生まれたい。ジョーがこの巨大な施設の中に拘束されているとき、偶然にも15年前のあの時と同じ鼓動のような振動が始まったばかりか、施設が厳重に管理していた巨大な物体は突然昆虫のような細い足を伸ばして研究所を破壊したうえ、背中から羽を伸ばして飛び去って行ったから、ビックリ。あれれ、こりゃまるでモスラ…。本作はゴジラではなかったの・・・？

■□■セリザワ博士の説明の説得力は・・・？■□■

日本版の初代『ゴジラ』は、志村喬扮する山根博士の「あのゴジラが最後の一匹だとは思えない・・・。もし水爆実験が続けて行われるとしたら、あのゴジラの同類がまた世界のどこかに現れてくるかもしれない・・・」との呟きで終わったのが印象的だった。そして後半のストーリーの焦点は、平田昭彦扮する芹沢博士が発明した、オキシジェン・デストロイヤーと名付けられた水中酸素破壊剤でゴジラを倒す（殺す）ことができるかどうか集中していった。そんな影響を受けているためか（？）、本作ではインロー・セリザワ博士（これは、芹沢博士と本田猪四郎監督へのオマージュを捧げる中で付けられた名前だが、なんとなく違和感あり！）のゴジラへの愛着（愛情？）が際立っている。

本作中盤は、セリザワ博士らが「ムートー」と名付けた昆虫型の巨大生物が、傍若無人にもハワイに上陸し、原子力潜水艦を襲い、核爆弾を飲み込みながらホノルルの市街地に侵入するサマが描かれる。そのためハワイは大津波に襲われ、ラスベガスはメチャクチャに破壊。まさに地獄絵そのものになっていく。だって、ムートーの電磁波攻撃によってすべての電源が停止されてしまえば、ムートーに向かう攻撃機等はすべて一瞬にして無力になってしまうのだから。そんな状況下、セリザワ博士の説明は、原子炉を体内に抱えたゴジラと放射物質をエネルギーとするムートーとは闘いが宿命づけられているというものだが、さてそんなセリザワ博士の説明の説得力は？さらに、本作後半はムートーが目指すのはネバダ州の核廃棄物保管場所だというセリザワの確信どおり、サンフランシスコでの「怪獣大決戦」という本作のクライマックスに向かっていくが、さて、その展開は・・・？

■□■1対2の決戦はなぜ？人間は一体ナニを？■□■

東宝の『ゴジラ』シリーズは50本にもものぼり、ゴジラ以外にもモスラ、ガメラ等のキャラクター（？）が生まれた。私はそれには全く興味を持てなかったが、本作ではムートーのオスとメスが互いに交信しあい、大量の卵を産み、自分たちの行動を妨害しようとするゴジラと1対2の死闘をくり広げることになるので、その手の対決が好きな人はそのお

楽しみをタップリと……。本作は、ムートーVSゴジラ対決の必然性をセリザワ博士流に科学的に解説してくれるからストーリーとしての違和感はないが、そこでは逆に人間の力の無力さが際立つことになる。

モナークの研究所と研究者をその支配下に収め、今はムートー退治のため核爆弾の使用を決断したのは、アメリカのウィリアム・ステンス提督（デヴィッド・ストラザーン）。彼の立てた戦略は、サンフランシスコの海洋上に時限式の核爆弾を設置して、そこにムートーをおびき出し、それを追ってやってくるゴジラもろとも核爆弾で退治してしまおうというものだが、ホントにそんなに計算どおりいくの？それに対して、セリザワ博士が立てた戦略は、ムートーを倒そうという意欲を示すゴジラに人間たちの運命を託そうという、いわば「他力本願」のものだが、さて、そのどちらが正しいの？

オスとメス2匹（2羽？）のムートーVSゴジラとの死闘は一進一退を続けたが、その間に人間たちは一体何を？ムートーの口をこじ開け、そこにゴジラ最大の武器である熱放射線を吹き込むシーンは本作最大の見どころだが、私の目にはいくら金をかけてそんなシーンを撮っても、それはしょせん子供だまし……。？本作のエンタメ性にケチをつけるつもりはないし、本作については賛否両論あるのが当然だが、私はどちらかというとな否定的。少なくとも、今後のハリウッド版『ゴジラ』のシリーズ化は無用と思っているが……。

2014（平成26）年8月28日記

ゴジラ等の怪獣は、何度『キネマ旬報』の表紙に？

1) 創刊95周年を迎えたキネマ旬報社は、キネマ旬報ムックとして「表紙でふりかえるキネマ旬報」を出版した。1919年7月に創刊された『キネマ旬報』は、B4アート紙2つ折り4ページ、月3回10日ごとに発行する、文字どおり「旬報」だった。その後、数度の終刊、廃刊、休刊を経て、1950年10月から現在の『キネマ旬報』となった。その表紙を飾るのは、美しいハリウッド女優が圧倒的に多いが、ハリウッドの男優もいるし、日本人の男・女優もチラホラ。

2) そこにゴジラが初登場したのは、1984年12月下旬号。そこにみるゴジラの勇姿は、「1954年の日本版」か

ら体型が全く変わらないから立派なものだ。日本の特撮映画が初めて表紙を飾ったのは森谷司郎監督の『日本沈没』（73年）だから、ゴジラは大きく遅れをとったことになる。しかしその後は、91年12月下旬号の『ゴジラVSキングギドラ』、96年7月下旬号の『ガメラ2 レギオン襲来』、98年7月下旬号の『GODZILLA ゴジラ』、99年3月下旬号の『ガメラ3 邪神＜イリス＞覚醒』と続き、2014年7月下旬号でハリウッド版『GODZILLA』が復活した。それらの表紙を見るだけで十分楽しめることまちがいなし！

2014（平成26）年10月31日記